会議議事録

|  |  |
| --- | --- |
| 事業名 | 令和５年度「職業実践専門課程等を通じた専修学校の質保証・向上の推進」事業  （２）教職員の資質能力向上の推進① 効果的な教育成果の公開方法等に関する支援体制づくりの推進 |
| 代表校 | 一般社団法人全国専門学校教育研究会 |

|  |  |
| --- | --- |
| 会議名 | 第5回授業改善サポーター養成講座開発委員会 |
| 開催日時 | 令和6年2月19日（月）15:00～17:00 |
| 場所 | リファレンス西新宿（ハイブリッド形式） |
| 出席者 | 事業責任者：成底　敏（OL）、岡村　慎一　　　　　　　　計2名  委　　　員：猪俣　昇、栗林　直子、合田　美子（OL）  伊藤　宏一郎、半田　純子（OL）、吉橋　大樹、  遠藤　和彦  計7名  請負業者　：細野　康男、萩原　千春　飯塚　正成　　　　計3名  　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　合計12名 |
| 議題等 | １）令和5年度の振り返り（成果物の確認等）  ：現在猪俣は成果報告書のスライドを作成しており、今年度の成果物として納品する予定（Youtubeで収録したものを成果物とする）  ：項目は以下の通り  　〇授業改善サポーターと当委員会の目的  　〇授業改善サポーター養成講座開発委員会の令和5年度の取組み  　〇次年度に向けた課題等  cf.)次年度に向けた課題  1. 使用しているコンテンツ（モジュール）の改変実証講座を元にした独自性の高いコンテンツの開発  2. 講座の標準化  　①誰もが運用、実施できる講座の構成とする  　②事業終了後の講座の継続性、普及、拡大  3. 講座の参加者のコミュニケーションツールの検討（再考）  使いやすく、馴染みのあるツールの検討（LINE等）  4. 研修の実施時期の検討  多くの教員が参加しやすい時期の検討  5. 研修の目的の明示  　①委員会として研修の目的を明確に学校側に伝える  　　〇対象者、到達目標  　　〇どのような対象者がどのように変わることを目的とするか  　　〇結果として、学校の運営にどう良い影響が期待されるのか  　　　→上記を理解したうえで、  　　　　以下のような方法で研修の効果を評価する仕組みを作る  　②参加を参加者に促す学校側  　　〇実施前：教員を参加させる思いを提示してもらう  　　〇実施後：期待した結果を得られたのかを評価してもらう  ・細野の発言  ：成果物は以下の通り  　〇授業改善サポーターの資質・要件に関する調査報告書  　〇講座事後に実施されたリフレクション取りまとめた情報  　〇実証講座の投影スライド  　〇シラバス  　〇次年度に向けた改善点  　〇授業改善サポーターに求められる資質・要件の仮説  ・合田の発言  ：IDの基礎を既に理解している教員が本講座に参加していると想定していたが、  IDそのものを期待していた受講生がいたのではないか  →研修項目にIDを取り入れる必要があるかもしれない  ・猪俣の発言  ：年度の表記が和暦と西暦が混在していたため、和暦で統一した方が良い  ２）成果物について  ・合田の発言  ：コンサルテーションにおける3つの資質を挙げたが、この資質は、研修の目標とタイアップするように纏めている。また、アンケート調査結果との齟齬が無いように調整をした。  ：今回の講座を機に受講生は自校で授業コンサルテーションの実践をしたが、引き続き実践が続いているかどうかを事後調査することで、より講座を改善できるのではと思った。  ：IＤ研修を受けた方を対象に募集をしていたが、IDの基礎やIDそのものを学べるかどうかについて問い合わせる受講生がいたため、IDを学びたいというニーズから受講した教員がいるかもしれないと思った。  →募集方法の改善や講座の中でIDついて詳しく取り扱う必要がある。  ：コミュニティについては、ディスコードの更新が無いことからコミュニティが続いていない現状が分かった。  →コミュニティを継続させるための仕組みが必要。  ：学校側が「受講生を研修に参加させたい理由」と「授業コンサルテーションが実  施できる環境」を整備する必要があると考えた。  ・猪俣の発言  ：IDの基礎が指すものを具体的に落とし込む必要がある。  ：全専研が提供しているID講座があるが、その講座が講座参加資格に資するのかどうかを確認する必要がある。  ：コミュニケーションを引っ張っていく人がいればコミュニケーションがうまくいく。  ：ツールの整備のみならず、コミュニティ運営方法について検討する必要がある。  →過去参加した研修では、参加する方の意識が高かったため、自然とコミュニティが形成され盛り上がっていった。仕掛けづくりを行う必要がある。  ：ツールと運営の両面からアプローチを検討する必要がある。  ・細野の発言  ：『講座事後に実施されたリフレクションを取りまとめた情報』において講座の課題  として9つ挙げたが、特にオリエンテーションは必要不可欠だと思った。  ：改善点の半数以上は運営に関わるものだった。今後は、9つの課題を解決できるような運営をする必要があると思った。  ３）今後について  ・岡村の意見  ：3回の研修を通して受講生の変化を見てきたが、オリエンテーションの有無や前提となる受講条件についての課題は残っている。次年度の講座フレームワークが立たないと事業計画を立てづらい。  ：講座フレームワークの見立てを具体的に考える必要があると思った。  ：今回参加した受講生は授業観察をしており、そこに課題点を感じていたのかどうか疑問に思った。  ・合田の意見  ：何人かの教員は授業観察をしていた。  ：だんだん受講生の自信がついたように見えたため、研修3回のフレームワークは悪くないと思っているが、今回の受講生に対して引き続きヒアリングをする必要がある。  ：講座の標準化について、「誰でもできる講座」にして良いのかどうかについては検討をする必要がある。  →「誰でもできる講座」にしてしまった場合、差しさわりのない内容で講座を設計する必要に迫られる。  ：授業歴などの条件をつけるなどをして、講座の標準化をする必要がある。  ・成底の意見  ：受講対象者を絞らなかったために、ID講座を受けていない教員が参加していた可能性がある。  ：事前課題はID講座の受講を課せば足並みが揃うのではと思った。  ：学校側として授業改善サポーターを設置したいという意思が必要。  （個人だと組織を動かせないため）  →案内の時点で、責任者に対して授業改善サポーターを配置する必要性を提案すると良いと思った。  ：事前課題の内容を専門学校に寄せるにすることが、来年度の取り組みの大きな柱となると思った。  ：「誰でもできる講座」とはいかずとも、経験や知識の条件を指定する必要があると思った。  ・半田の意見  ：前提知識の提供やオリエンテーションの参加機会を設けた方が講座の成果が出ると思った。  ：個人では授業コンサルテーションをしづらいということを理解し、学校組織が個人をバックアップできるような姿勢を促す必要があると思った。  →受講生も今後動きやすいうえ、組織を通して成果を聞きやすくなる。  →サポーターを養成することの理解をいただくことが必要。  ・吉橋の意見  ：今後、課題点をつぶしていけば、より良い講座になるのではないか。  ・遠藤の意見  ：講座の標準化を考えた場合、合田先生と同等の人材を養成するのは厳しいのではないか。  ：授業改善サポーターとして教育に必要な知識や技能に対して自信を持ち、組織改革を行える人材が育成できるような講座にしたい。  ・伊藤の意見  ：コンサルテーションをする立場の教員のモチベーションを保つ仕組みとして、組織的なバックアップが必要。  ：コンサルテーション支援をした結果、支援を受けた教員がどのように授業コンサルテーションが出来るようになったのか、など、先を見据えることも大切。  ：次回は、授業コンサルテーションの事例発表をすると講座の成果が広がるのではないか。  ・栗林の意見  ：『講座事後に実施されたリフレクションを取りまとめた情報』の課題のうち、③⑤⑥については同様の感覚を持っている。  ：各教員は積極的に参加していたため意義深い講座とはなったものの、各教員が講座に参加してもらう一番の理由は、授業を通して学生との信頼関係を構築することを目指しているからではないか。  ：本講座が意義深いものであるということを伝えることで先生のモチベーションの動機付けを提供する必要がある。  →そのために組織への働きかけを実施する。  ：授業がうまくいかない理由として、さまざまな課題がある。その中には組織的な課題も出てくるため、学校責任者と受講生が伴走する仕組みが必要。  →募集段階を含めて、講座の意義をくみ取ってもらえるようにする。  ・細野の意見  ：講座の受講対象者の精緻化はクリティカルに対応すべきであると考えた。  ：受講者への案内のみにとどまらず、教員や上長を巻き込むことや、意図して講座に参加しているのかどうかの確認はマストだと思った。  ：教員との運営側の伴走については、課題の進捗管理のみならずチュータリングの役割も検討して良いと考えた。  ・飯塚の意見  ：プログラムが継続して運用されるor 売れるものとなる必要がある  ＝作りっぱなしではなく使えるものになるのかを考えるのが重要。  ：IDについては既に出来上がっている成果物があるので、全専研として立体的に研修パッケージを組み込む必要があると思った。  ：今回の講座は、出発点とゴールがはっきりしていなかった。  →出発点＝「あなたの授業を良くする」ではなく、「あなたの部下の授業を支援する」という意図が伝わり切らなかった。  →ゴール＝「あなたを最終的にこういった人材に育て、そのためにこういった評価をする」といった方針が明確になっていなかった。  →合田先生にプロセス全体をカバーしてもらったため、今後は自律的な講座にする必要がある。そのために出発点とゴールを設定すると良い。  ：3月末から4月上旬に次年度の計画書を作成するが、権利の整理と規模感を明確にする必要がある。  →講座を何回、いつ、どのくらいのスパンで実施するのかについても明らかにしないと予算を作れない。  ・猪俣の意見  ：スライドには記載しきれない課題点がある。  ：ひとつひとつの課題を乗り越えたらより良いものを作れるのではないか。  ：来年以降のより良い講座の実施に向けて動き、普及していきたい。 |
| 配布資料 | ・授業改善サポーターの資質・要件に関する調査報告書  ・講座事後に実施されたリフレクションを取りまとめた情報  ・授業改善サポーター養成講座2023\_研修1\_11102023\_実用（PPT）  ・授業改善サポーター養成講座2023\_研修2\_12112023\_実用（PPT）  ・授業改善サポーター養成講座2023\_研修3\_01152024\_実用（PPT）  ・シラバス  ・次年度に向けた改善点  ・授業改善サポーターに求められる資質・要件の仮説  ・R5全専研\_成果報告用（教員研修） |

以上